

高津 5 期の皆様

ナイチンゲールもトルストイも嘆いたクリミア戦争

2022年4月5日

太田 隆次

コロナウイルスも大変ですが、連日のトップニュースでは不幸にして、ロシアのウクライナ侵攻が続いています。高津高校では藤原先生の「西洋史」でしたが、ロシアとウクライナの歴史は習った記憶がありません。

添付は在米のメル友（医師）からのメールです。

少し長いので全部読むには時間は掛かりますが、読みやすい文章で時節柄有益なので（特に後半はウクライナ訪問記があります）

高津HPの皆様には是非、お読み頂ければと思います。

全てはクリミア戦争から始まった

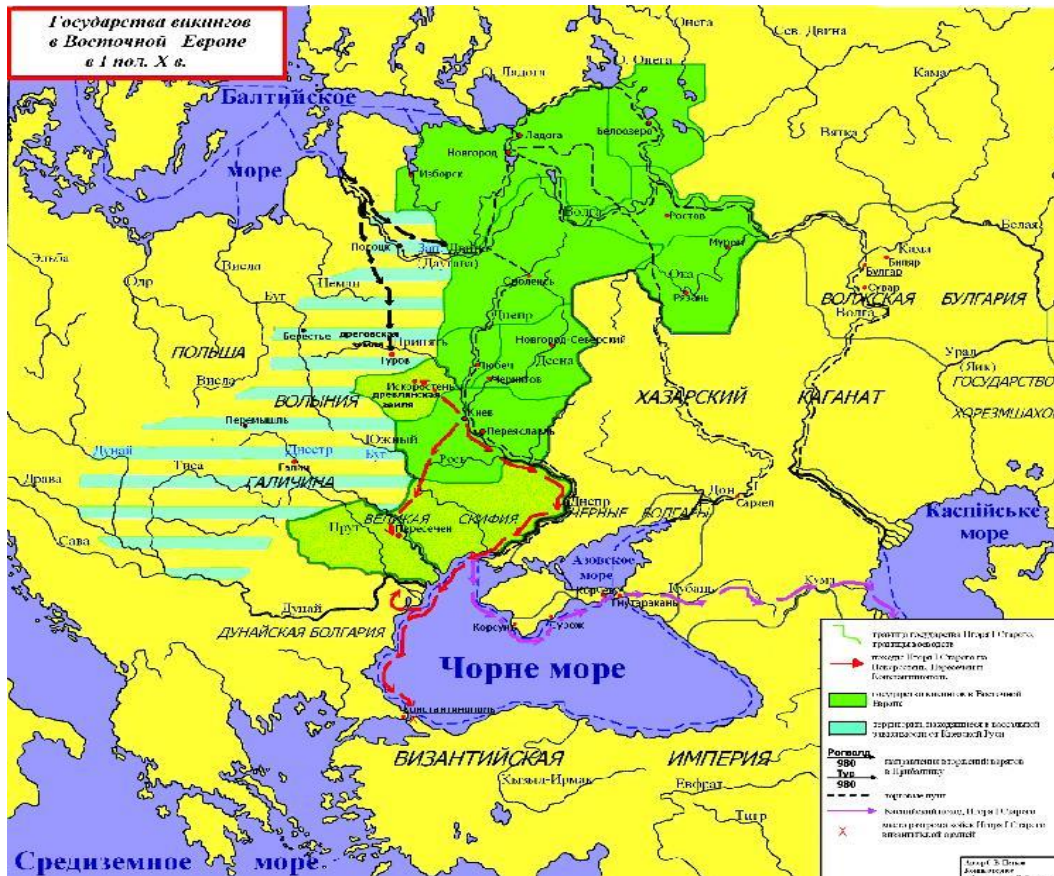
2022年4月1日 H. Y

1. クリミア戦争以前

*なぜウクライナはロシアの兄弟なのか？

嚆矢はキエフ＝ルーシ公国で、882年首都をキエフとした商業国家だった。9世紀末、ノルマン人大移動の一環で、ヴァイキング(彼等は自らをルーシと称した)を率いたリューリクはノヴゴロド国を建国。一族のオレーグは、ビザンツ帝国との交易を目指して南下し、882年ドニエプル川中流のキエフを占領して都にした。実質的なキエフ(キエフ＝ルーシ)公国の成立である。912年 リューリクの子のイーゴリが大公として治めることになった。988年 キエフ大公ウラディミール1世は、ギリシア正教に改宗し、ビザンティン帝国(東ローマ帝国)の皇女を妃に迎えたことで、東ローマ帝国に遡る正統性の系譜を得た。ビザンツ文化の花が咲いたこの国は、ほぼ現在のウクライナにあたる。

キエフ公国大公イーゴリ1世(在位 923年- 945年)治世下のキエフ・ルーシ



モンゴル帝国の第 2 代皇帝オゴデイは遠征を決議し、西方遠征軍の総大将となったジョチ家の当主バトゥに 5 万の戦闘経験の豊かなモンゴル兵と 2 万人の徴用兵、さらに漢族とペルシア人の専門兵が与えられた。モンゴル高原を出立したバトゥは、1240 年キエフ公国を占領しキエフ公を処刑。1241 年のワールシュタットの戦い (Schlacht bei Wahlstatt) 別名リーグニッツの戦い (Schlacht bei Liegnitz) で迎え撃ったドイツ・ポーランド連合軍は、民兵や徴用歩兵、封建騎士と従者、ホスピタル騎士団、テンプル騎士団、そしてドイツ騎士団の約 2 万 5 千だった。モンゴル軍が勝利したが、1242 年バトゥはオゴデイの訃報を受けて引き返し、オゴデイの後継が決まらず紛糾するのを見て、ヴォルガ川下流に留まることを決め、自立政権を築いた。俗に言うキプチャク汗国である。ルーシはいくつかの地方政権こわかれ、それぞれキプチャク=ハン国に貢納してその間接的支配を受けることとなった。

ジョチ・ウルス(キプチャク汗国)の版図(西暦 1300 年頃)



13 世紀にモンゴル人徴税官バスカクがロシアの市場を訪れた光景を描いた絵画（1902 年描）バスカクは「タタールの軛(くびき)」の象徴。



*モスクワ大公国 (たいこうこく)

いくつかある地方政権の中で、次第に有力となったのがモスクワ公国だった。キプチャク汗国に対しては臣従の姿勢を示してその徴税を請け負い、14世紀前半のイヴァン1世の時から、モスクワ大公国と言われるようになった。15 世紀後半にモンゴル勢が弱体化し始めると、当時は「ロシア」と呼ばれていた旧キエフ大公国の一部が正統性を取り戻そうとした。しかし西部地域では、現在のウクライナ西部の大半がポーランドに併合され、ベラルーシがリトアニアに吸収されるなど、様々な脅威に曝されていた。かつてキエフ大公国の中心地だったウクライナがその名を得たのは、この頃だった。ウクライナと呼ばれるようになった根拠について、ウクライナ人は、ウクライナ語の「oukraina」は「中央に所属する土地」を意味し、キエフ大公国を取り囲む土地、あるいは直接的に従属する土地を指すと言う。ウクライナ人にとってはキエフ大公国の系譜への強い帰属感をもたらす説である。露和辞典を引くと、ロシア語では「辺境の」という意味が出て来る。

扱、ロシアは、正教会における自らの位置付けと、ローマ帝国に連なる国家的・政治的な正統性の起源を唱える必要に迫られた。「第2のローマ」であるコンスタンティノープルがイスラム国家のオスマン帝国に1453年に征服されたため、モスクワが「第3のローマ」にならねばならない。モンゴル人の侵入を受けたキエフ大公国も分裂し、栄華を誇ったキエフは荒廃し、ロシアに君臨していたビザンティン帝国皇帝も消えた。この視点はロシアの権力構造に有用だった。ロシアの総主教の支援を得て、君主による中央集権的な統治が実現し、モスクワが切望していた正統性も得られた。ロシアの統治者は、ビザンティン帝国皇帝の血を引く人間と結婚し、自分たちが帝国の継承だと正当化するため、様々な神話を作った。ローマを支配していなければローマ皇帝とは呼ばれないように、ロシア全土を支配していなければロシア皇帝とは呼ばれない。キエフ大公国の文化的・歴史的・宗教的な重要性は確かに大きかった。だが西方の失われた領土を奪還し、一方では東方への拡大を目指すロシアの皇帝達にとってそれは問題ではなかった。ロシア帝国は文化的記憶から他の東スラブの言語を消し去ろうとした。ウクライナやベラルーシが一度も存在したことがないかのような姿勢を取ったのだ。ロシア帝国によればウクライナ人は昔からロシア人であり、独自の歴史を持ったことがない。ウクライナ国家主義はロシアの建国神話にとって脅威であり、「全ロシア国民」をつくり出す彼らの試みにとっての脅威だった。

モスクワ大公国はロシアのいくつかの公国を併合し、キプチャク汗国への貢納を拒否したイヴァン3世は、1480年モンゴル軍を退却させて「タタールの軛」からロシアを解放した。またイヴァン3世は滅亡したビザンツ帝国の皇帝の姪と結婚して、その国章である「双頭の鷲」を継承し、後継国家としての権威を得た。これによって都のモスクワは「第三のローマ」と言われることになる。日本で言えば由緒あるキエフが京都であり、新興のモスクワが江戸・京都に相当するとも言えるだろう。

しかし、その戦力である騎士に与える封土が不足した。イヴァン3世の法令で農奴制が強化され、農民への拘束を嫌って南部に逃れる農民が多くなり、彼らはコサックとなって一定の力を持つようになっていった。

*ウクライナ・コサック

コサックは、本来は14世紀後半から現在のウクライナに当たる地域を治めていた自治集団だった。ウクライナ語の発音に近い表記は「コザーク」。現在のウクライナの地域にあったコサック集団はそこにあった町や村の数だけあった。それらは基本的に互いに独立して、西欧における小国家(ドイツ地域の王国、公国などのような)と同様の小共同体を形成していた。ウクライナは、バトゥ率いるモンゴルの襲来によりキエフ＝ルーシ公国が崩壊した後、リトアニア大公国、ポーランド王国、モスクワ大公国等様々な周辺国によって支配されてきた経緯があるため、コサックもそれら様々な勢力に属し、或は独立を求めて反旗を翻してきた。ポーランドに対し叛乱を起こしたボフダン・フメリニツキー、ロシアに対し叛乱を起こしたイヴァン・マゼーパは特に有名である。

1648年に民族的・宗教的弾圧のためにウクライナ・コサックは、ポーランドからの独立戦争を起こし、ポーランドと戦うために1654年にロシアと同盟を結んだ。ロシアは戦争に介入したが、1667年にポーランドと単独講和し、アンドルソヴォ条約によりポーランドとのウクライナの分割を行った。コサック国家は分裂し、その東部はロシア帝国内における自治国として1787年まで存続した。18世紀末にロシアは、ポーランド分割とクリミア汗国の併合を行い、西部を除いてウクライナ的全領域を支配下に置いた。ウクライナの自治制が廃止されたものの、ウクライナ人の多くはロシア帝国の運営への参加が許された。ロシアはウクライナでロシア化という同化政策を進め、ウクライナ人のコサックと農民をコーカサス、シベリア、中央アジアと極東の植民地化に利用した。ロシアの巨大な版図は、勇敢なコサックの御蔭だと言っても良い。

イスラム教徒の頸を串指しにして凱旋するウクライナ・コサック(1786年の画像)



*イヴァン雷帝

イヴァン4世(雷帝)は1547年に正式にツァーリとして戴冠式を行う。彼は親衛隊を組織し、残虐な手法によって大貴族層を抑圧して恐怖政治を行ったので雷帝(グロズヌイ)と言われた。さらに農奴制を強化して増税を強行し、軍事力を強めてカザン=ハン国・アストラハン=ハン国などの征服を成功させた。1584年にイヴァン4世(雷帝)が死去すると、次男ヒョードルが継承(長男イヴァンは1581年11月に父に殴り殺された)したが、統治能力が無く、実権はその妃の兄のボリス=ゴドゥノフが握った。さらにヒョードルが死んで後継者がなかったためリューリク朝は断絶し、1598年に貴族会議でボリス=ゴドゥノフが皇帝(ツァーリ)に選出された。彼は対外戦争を終わらせる一方、外国貿易を盛んにしたり、大学を設置したり、近代化政策を採って評価される面もあるが、ヒョードルの子ドミトリーを暗殺した疑いが強く(おそらく真実)、人気はなかった。そのためその死は、死んだはずのドミトリーを名乗る人物が次々と現れ(偽ドミトリー)、皇帝を称するなど混乱が続き、動乱状態となった。

イワン雷帝とその息子: Иван Грозный убивает своего сына) ロシア画家イリヤ・レーピン(1885年作)の絵画は印象的で一生忘れ得

ない。息子を殴り殺した雷帝の狂気、そしてロシア人の異常な残酷さを想起させる。



それにつけ込んだポーランドが一部のロシア貴族と結んでモスクワを占領すると、民族派の貴族が団結してモスクワをポーランド軍から奪還し、全国会議を召集して新しい皇帝に、ボリス=ゴドゥノフによって追放されていた貴族ロマノフ家の後継ぎの16歳のミハエル=ロマノフを選出し、動乱時代を終わらせた。1613年、ミハイルが即位し、ロマノフ朝が始まった。王朝は1917年のロシア革命まで続く。

2. クリミア戦争

***クリミア戦争 (Crimean War, Guerre de Crimée, Крымская война)**

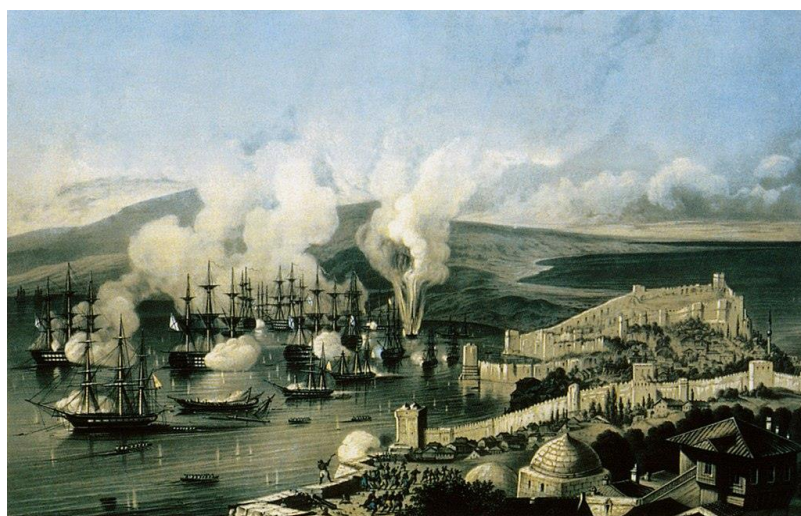
1853-1856年、クリミア半島を中心に行われた戦争。

フランス・オスマン帝国・イギリスを中心とした同盟軍とサルデーニャが、ロシアと戦った。戦闘地域はドナウ川周辺、クリミア半島、カムチャツカ半島にまで及んだ。この戦争で後進性が露呈したロシアは抜本的な内政改革を余儀なくされ、外交で不調だったオーストリアも国際的地位を失う一方、イタリア統一戦争への下地を整えたサルデー

一ニヤや、戦中に工業化を推進したプロイセンがヨーロッパで影響力を強めた。北欧では英仏艦隊がバルト海に侵攻した。

1853年11月、黒海南岸の港湾都市シノーブで停泊中だったオスマン帝国艦隊が少数のロシア黒海艦隊に奇襲され、艦船のみならず港湾施設まで徹底的に破壊されるというシノーブの海戦が起きた。これは黒海艦隊の偵察に気づいていながら、イスタンプールに援軍を要請する以外に何も行わなかったオスマン帝国側のミスだったが、余りにも一方的な攻撃だったため、各国のメディアはこれを“シノーブの虐殺”と報道した。

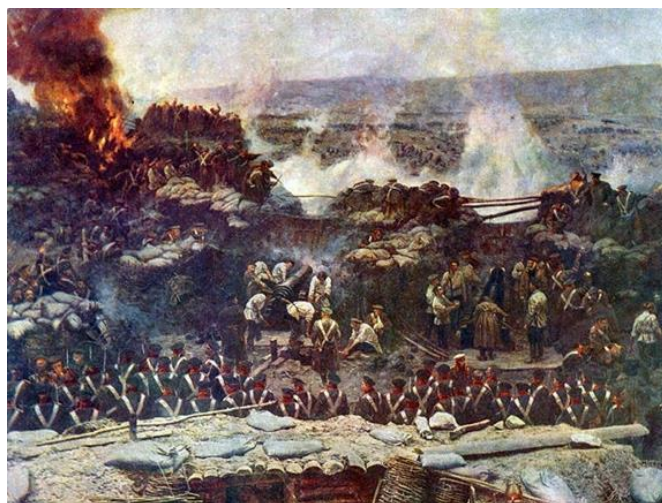
シノーブの海戦 Battle of Sinop



これにより、イギリスでは世論が急速に対ロシア強硬論へと傾き、フランスとともにオスマン帝国と同盟を結んで1854年3月28日、ロシアに宣戦布告した。イギリスがヨーロッパへの大規模な遠征軍を編成したのはナポレオン戦争から第一次世界大戦までの100年の間でこの1度だけだった。当初、同盟軍は軍隊を黒海西岸のヴァルナ(現在のブルガリア東部)に上陸させてオデッサの攻略を目指したが、突如オーストリアが国境線に部隊を配置して同盟軍のバルカン山脈以北への進軍を阻止したため、攻撃目標はロシア黒海艦隊の基地があるクリミア半島の要衝セヴァストポリへの変更を余儀なくされた。主力の英仏軍は現地の事情に疎く、クリミア半島に部隊を移動させた直後から現地の民兵やコサックから昼夜を問わず奇襲を受け、仏海軍は黒海特有の天候について調べていなかったため、停泊中の艦隊が嵐に巻き込まれ、戦う前からその大半を失った。ロシア軍は指揮の面で不備が多く、アルマの戦いでは地の利があるにも拘わらず、フランス外人部隊とスコットランド連隊に敗れてセヴァストポリへの進軍を許してしまった。一方、フランス語の堪能なロシア人士官が化けた偽指揮官等による攪乱工作により、バラクラヴァの戦いやインケルマンの戦いでは辛うじてロシア軍を退けるも被害が著しく、セヴァストポリを前にして立ち往生する羽目になった。

ロシア軍は英仏艦隊から直接セヴァストポリを砲撃されないよう湾内に黒海艦隊を自沈させ、陸上でも防塁を設けて街全体を要塞化したため、同盟軍は塹壕を掘って包囲戦を展開する以外に手がなく、英軍は化学兵器(亜硫酸ガスではないかといわれている)まで使用したが、長期化により戦死者よりも病死者の方が上回り、戦争を主導したイギリス国内でも厭戦ムードが漂った。最終的に、サルデーニャ王国がピエモンテに駐屯する精鋭 15000 人を派遣して同盟軍に与したことにより、3 日におよぶ総攻撃の末にナヒーモフもコルニーロフも戦死し、1854 年 9 月 28 日から始まったセヴァストポリ包囲戦は 1855 年 9 月 11 日に陥落し終結した。連合軍の兵士による略奪が直ちに始まった。

ロシア軍の守るマラコフ Malakhov 要塞は、フランス軍の攻撃正面である。セヴァストポリ包囲戦最大の激戦地だった。



1855 年 3 月ロシア皇帝ニコライ 1 世が死去し、即位したアレクサンドル 2 世はロシア軍総司令官のメンシコフを罷免した。同盟国側と和平交渉が進められた。明確な戦勝国のない状況で始まったパリ講和会議は、1856 年にオーストリア帝国とプロイセン王国の立会いの下でパリ条約を成立させた。この戦争で産業革命を経験したイギリスとフランス、産業革命を経験していないロシアの国力の差が歴然と証明された。建艦技術、武器弾薬、輸送手段のどれをとっても、ロシアはイギリスとフランスより遥かに遅れをとっていた。

*悲惨さ

1855 年 11 月ヴィクトリア女王が慰問した際に撮影された、英国の三人のクリミア戦争負傷兵の写真がある。余りにも残酷なので掲載は避けるが、一人は砲撃で両眼を失い、一人は凍傷で両脚を失い、もう一人は塹壕の凍傷で左膝から下を失っている。

戦争の恐ろしさが窺われる。40 年前のナポレオン戦争比べると兵器技術が進歩し、戦傷は遥かに深刻なものになっていた。後年の明治維新の戊辰戦争や西南戦争は、この技術を基盤にしているので、日本人の戦傷も酷かっただろうと想像される。現在のウクライナ侵攻の戦闘も同様の寒さ、ゾットするような惨状が想像される。

塹壕を掘って包囲戦が展開されるが、極寒と泥濘に双方の将兵は苦しんだ。これに銃弾と砲弾の恐怖が加わる。英仏軍は幾度となく突撃を繰返し、その度に銃撃を受けるので、戦死者の屍が累積する。ロシア兵も死に物狂いである。日露戦争の旅順攻撃を彷彿とさせる。軍港と要塞の地形も旅順とよく似ている。ロシア人的発想にも関係があるかもしれない。満足な医療も受けられず、凍傷や負傷で次々と死んで行く光景が浮かぶ。兵站の手当は最悪だった。

最終段階ではロシア兵の投降が続出したようだ。寒さと恐怖だけではなく、飢餓もその原因だった。

夜襲の恐怖は格別だ。襲撃が白兵戦になる恐ろしさは耐えられるものではなかった。砲撃のショックで精神異常を来すのは、日露戦争、第一次大戦、第二次大戦皆同じである。

この寒さを知ると、現在のウクライナ兵士の苦勞が想像出来る。北海道最北で指揮官をしていた陸上自衛隊の将官が話していたが、零下 20 度になると動きが取れず訓練を止めるのだそうだ。ウクライナ戦線では当たり前の温度である。死の恐怖だけではないのだ。二度の寒い冬を越さねばならなかったのは、スターリングラードの攻防と同じだった。

* 日本への影響

太平洋側のロシア極東にも戦争は波及した。英仏連合の海軍は 1854 年 8 月末、カムチャツカ半島のロシアの港湾・要塞ペトロパブロフスク・カムチャツキー攻略を目論んだ。英仏連合軍は砲撃後、同年 9 月に上陸したが、陸戦で大きな犠牲を出して撤退した。英仏連合が再攻撃をかけた時には、ロシア軍は撤退した後だった。ロシアの守備隊は 1855 年の初頭に雪の中を脱出した。これと並行して、エフィム・プチャーチン海軍中将が日本と開国交渉した。プチャーチンは、開戦前にロシア本国を出発し、1853 年 8 月に長崎に到着。外交交渉に着手していたが、交渉が長引く中で英仏両国との開戦の情報に接し、東シベリア総督ニコライ・ムラヴィヨフとも協議の上、日本との交渉を続行した。英仏の艦隊との遭遇・交戦の危険を控え、1855 年 1 月に日露和親条約の締結に成功している。また、プチャーチンが長崎に入港中との情報を得、英国東インド・中国艦隊司令ジェームズ・スターリングは、長崎に侵入した。到着時既にロシア艦隊は長崎に不在。英国とロシアが交戦中であること、ロシアがサハリンおよび千島列島への領土的野心があることを幕府に警告し、日本の局外中立を求めた。長崎奉行水野忠徳は、イギリスの軍事力への恐れから、条約締結を提案し、1854 年 10 月 14 日に日英和親条約が調印された。日本の北方でロシア海軍との

交戦を行うためには、日本での補給可能は大きなメリットがあった。新興国で大海軍も持っていないアメリカが、この時期ペリー提督を派遣して日本に対し砲艦外交を展開し得たのは、クリミア戦争のため欧州列強の関心が日本等の東アジア地域に及ばなかったことも理由の一つだった。

3. ナイチンゲールとレフ=トルストイ

1) ナイチンゲール

クリミア戦争の悲劇に思い余って従軍し、活躍した様子は、とても浪漫的な状況ではなかったようです。調理場のありかたを一新し、新規にボイラーを購入し、トルコ人の洗濯女を雇って監督し、病棟の清掃状態を監視し、毎晩病棟を巡回し傷病兵にキリスト教徒として言葉を掛けました。小学生の頃に抱いた彼女のイメージは「優しい白衣の乙女」でした。「ランプを持つ貴婦人」伝説です。実際には厳しいリーダーとして、野戦病院の血塗れの医療現場で闘ったようで、浪漫的淑女の雰囲気は一切ありませんでした。嘗てのイメージと余りにも隔絶しているので、戦争の悲惨さが一層身に沁みました。

2) レフ=トルストイ Лев Николаевич Толстой

開明的な思想の持ち主で、ロシア貴族でした。壮絶な激戦地だったマラコフ Malakhov 要塞(上図参照)から西へ2kmの地点にある第四要塞に、彼は新品少尉として着任しました。

連日 2000 発の砲弾がフランス軍から撃ち込まれ、最初は怖気づいたようです。彼はセヴァストポリ包囲戦の体験から『セヴァストポリ物語』(1855)を著し、に非暴力主義を展開する素地にもなりました。その当時字の読めるロシア人は全員が読んだと言われています。この本は所謂「ロシア精神」を集中的に具現した小宇宙としてのこの町を国民の間に定着させた、と歴史家が書いています。つまり、「外敵に侵略されても常にそれを跳ね返して祖国を救って来たロシア人の勇気と粘り強さを意味している」と言う訳です。彼はセヴァストポリのロシア守備兵の顔に「セヴァストポリは決して敵の手には落ちないと言う確信」を視ます。セヴァストポリはクリミアそのものですから、プーチンの顔が自ずと浮かんで来ます。

ロシア兵は農奴の身分で、戦場での悲惨な扱いは目を覆うばかりだったようです。兵役に志願すれば農奴から解放されると言う噂もありました。トルストイは彼等に同情的でした。先ず軍隊での体罰禁止を取上げました。ロシア軍苦戦の理由の一つは兵に対する野蛮な懲罰だと論じました。重火器の改善も要求しました。

連合軍のミニエ銃に対してロシア軍は無力だったようです。彼はロシア軍上層部の無能ぶりも指摘しました。当時流行ったミハイル=ニコライエヴィッチ大公の風刺歌はトルストイ作だとの噂も流れました。彼は結局着任時の少尉から昇進することはありませんでした。

60 年後に日露戦争があり、その従軍記を小学校時代に読んだことがあります。

「兵隊は人間扱いされず、公園に『犬と兵隊(農奴)の立入り禁止』の掲示があった」の一節が印象的で、今も憶えています。

4. パリ講和会議

敗戦国ロシアは領土を失ったが、もっと深刻だったのはロシア国家の威信を失ったことだった。戦前、ロシア国民の大多数は、「ロシアは世界で最も豊かな国」、「ロシアは最大にして最強の国家」というイメージを抱いていたが、敗戦に依って突如瓦解した。ロシアの後進性が白日の下に露呈された。クリミア戦争によって、ロシアのあらゆる制度と仕組みの不備、軍事指導部の腐敗と無能、陸海軍の技術後進性、インフラ不備による補給問題、兵士の中心たる農奴の貧困、貴族政治の欠陥、傲慢頑迷なニコライ 2 世による国家の破滅と膨大な犠牲者を生んだこと、が俎上に上がった。ロシア共産党とPutinとを代入すると、正に現代と同一の感慨を得る。

1856 年クリミア戦争のパリ講和会議で、イギリス、フランス、オーストリア、プロイセン、サルデーニャ、オスマン帝国、ロシア 7 カ国が条約を締結し、欧州の勢力均衡の転換点となった。

プロイセンは受動的な傍観者としてパリ会議で冷遇されたが、ロシアとオーストリアの不和に乗じてドイツ連邦での主導的な立場を固め、ロシアの好意も引き出した。このロシアによる支持が、1864 年のデンマーク戦争、1866 年の普墺戦争、1870 年の普仏戦争でのプロイセンの勝利を齎した。

クリミア戦争は、列強同士の戦争が「制限的」な方式でも起こり得る事実を立証しつつ外交の性格を変えた。クリミア戦争後の列強は以前より攻撃的になり、外交は戦争と照応する傾向が濃くなった。Putin のクリミア侵攻後の現世界と酷似している。

以降列強は、各自の国益のままに帝国主義に走る。イギリスは栄光ある孤立を選択し、大陸の列強は、欧州域内の勢力均衡を図るため交互に同盟を結び、ヨーロッパは産業革命と植民地主義とを掲げる時代へ突入した。我々の現実世界はどうなるのだろうか。

1) 黒海艦隊

1783 年、セヴァストポリを本拠とする黒海艦隊がエカテリーナ2世の命令によって創設された。黒海はロシアにとって貴重な不凍港を提供する。セヴァストポリはロシアの対トルコそしてバルカンへの影響力拡大の拠点となり、クリミア戦争当時の皇帝ニコライ1世は次男をコンスタンチンと名付けた。オスマントルコの首都イスタンブールを取り返し、ビザンチン時代のコンスタンチノープルとする野望を示唆していた。

しかしクリミア戦争の敗北でロシア帝国は艦隊の保有を禁止された。黒海は中立化し、1841 年のダーダネルス=ボスフォラス海峡閉鎖の原則が確認され、ロシアの南下政策は一旦

頓挫した。英国艦隊は自由に航行出来るが、ロシアは沿岸部に防衛線を築かねばならなかった。現在のオデッサ、クリミア半島の重要さが判る。1860年代のロシアの関心はシベリアから極東方面に向かった。

しかし、アレクサンドル2世は1870年代に南下政策を強め、1877年にバルカン進出を図った露土戦争で勝利した。パリ条約ではバルカン半島の現状を規定した秩序となっていたが、ロシアに黒海が戻って来た。普仏戦争までのロシアのプロイセン協力が実ったのだった。1878年にビスマルクがベルリン会議を開催、その巧妙な外交によりロシアの南下政策は再び抑えられた。この怨みはプーチンまで続く。

2) トルコ社会

今回のプーチンのウクライナ侵攻で、トルコはダーダネルス=ボスフォラス海峡を閉鎖しました。歴史は繰り返しますね。

クリミア戦争はトルコ社会の全ての分野に影響を与えた。戦争を契機に、トルコは西欧化して行った。ロシアから追われた大量の難民だけでなく、コンスタンチノーブルには様々な外国人が欧州から到来した。外国資本投入も大きく、電信や鉄道、ジャーナリズムも到来した。

一方、ロシアは大量のイスラム教徒を領内から追い出し、オスマン帝国から大量のキリスト教徒が流入した。イスラムとキリスト教との相克は発展し、広くパレスチナを始め中近東に拡がり、今日に至っている。聖墳墓教会を取り巻くエルサレムの宗教抗争にも火が付いたブルガリアを見てみよう。クリミア戦争後、約50万人のタタール人とチェルケス人がロシアの支配を逃れてブルガリアに流入したため、キリスト教徒とイスラム教徒との軋轢が高まった。新たな移住者は半遊牧民的であり、キリスト教徒農民の村を襲って家畜の略奪が起こった。トルコ支配に憎悪し敵愾心を抱くブルガリア蜂起軍は1876年春にイスラム教徒への襲撃を開始した。オスマントルコ政府はイスラム教徒の部隊を編成し鎮圧させた。残忍なやり方で、約15,000人のブルガリア人が虐殺された。

1972年公開のブルガリア映画「炎のマリア」は、時代設定こそずれているが、トルコ人に虐殺されるブルガリア人の悲哀を如実に伝えている。

このニュースは英国にも伝わり、深刻な影響を与えた。ロシア国民にも衝撃が走った。クリミア戦争の戦勝国に復讐したいと言う国民感情に火が点き、1877年には露土戦争が起こった。ロシア軍はコンスタンチノーブルと指呼の距離にあるアドリアノーブルを占領した。ここで、英国は地中海艦隊をダーダネルス海峡に派遣し、休戦が成立する。サンステファノ条約で、トルコはルーマニア、セルビア、モンテネグロの独立を承認し、大ブルガリア公国(含むトラキア一部とマケドニア)の設立が成った。ロシアはクリミア戦争で失っていたベッサラビア南部を取り戻し、黒海沿岸が強化され復讐が成った。

バルカン半島の正教徒による汎スラヴ主義は第一次大戦にまで及んで行く。そして、1990年代の旧ユーゴスラビアの内戦にまで。そして、ロシアとトルコの因縁は今も続いている。

3) フランスとイタリア

開催国であるフランスは、満足な成果を得られなかった。ナポレオン3世がイタリア統一とポーランド復活を目玉にしたヨーロッパの再編企図は、無に帰した。サルデーニャは、クリミア戦争後半に参戦して発言権が弱かったため、期待に叶った補償は得られなかった。

しかし1857年ナポレオン3世はアレクサンドル2世と直接会談し、イタリア統一に向けて、フランス・サルデーニャ連合軍がオーストリアと戦端を開いた際、ロシアの支援の約束を得た。フランスはロシアの黒海問題について「将来に亘り解決に協力する」と約した。

この時フランスは、協力の代償としてサルデーニャからニースとサヴォイア(バイロン卿-シヨン城の項参照)を獲得した。これはニース出身の英雄ガリヴァルディには辛いことだった。サルデーニャのカヴール首相はイタリア統一の際の英仏の強力を期待してクリミア戦争に軍を派遣したのである。1859年に、ナポレオン3世の仏軍とヴィットリオ=エマヌエーレのサルデーニャ軍は、ソルフェリーノの戦いオーストリアに勝利した。決定打である。トリノにあるイタリア統一(リソルジメント)博物館で見た、イタリア人の絵を思い出します。

4) オーストリアとロシアの均衡

ロシアとオーストリアの関係は半永久的に破綻した。ロシアはプロイセンに接近し始め、孤立したオーストリアはイタリアとドイツでの影響力保持のためにロシアの支援を期待出来なくなった。

中立的立場から一歩後退し、北イタリアの支配権を保障される形式で英仏と結託したオーストリアは、ドナウ戦線に軍隊を進駐させることで、事実上の反ロシア態度を明確にした。1848年革命の後遺症は残っており、1854年後半までガリツィアとトランシルバニアなど辺境地域では革命勢力の蠢動が続いていた。このように不安定な情勢は、国際舞台でオーストリアの行動範囲を制限させる要因として作用した。クリミア戦争の波は、欧州協力体制の仲裁者と自任してきたオーストリアに大きな打撃を与えた。

5) ポーランド

1863年にポーランド蜂起が起こった。1861年のイタリア統一が刺激を与えた。アレクサンドル2世はポーランド総督に戒厳令を布告させて激しく弾圧した。蜂起のゲリラ戦の核心は、ポーランド・リトアニア・ベラルーシ・西ウクライナ等のカソリック域の森であり、クリミア戦争に従軍した元兵士達だった。教皇ピウス9世は、ギリシア正教徒のロシアに対するカソリック聖戦を行うべくフランスを煽ったが、ナポレオン3世はメキシコで忙しかった。ロシアは徹底弾圧に乗り出し、ポーランド各地を町や村ごと焼き払い、数万人の男女をシベリアへ

送り、数百人を公開の場で絞首刑に処した。今のウクライナの状況や、ポーランドの支援が、歴史的な系譜で裏打ちされていることが窺われます。

5. 第二次世界大戦

1939年9月、ソ連はポーランドに侵攻し、占領した西ウクライナをウクライナに組み入れた。カルパト・ウクライナの独立が宣言されたが、ドイツはその領土を同盟国ハンガリーへ編入させた。1941年6月に独ソ戦が始まりキエフ包囲戦で、66万人以上のソ連兵が捕虜になった。

ドイツとソ連の開戦により、スターリンの恐怖政治に怯えていたウクライナ人の中に、解放への期待が高った。ドイツ軍は当初「解放者」として歓迎され、ウクライナ人の警察部隊が結成された。独ソ戦では、ウクライナも激戦地となり、500万以上の死者を出した（プーチンの先輩であるソ連・内務人民委員部 NKVD はウクライナから退却する際に大量殺戮を行っている）。

しかし、ウクライナの政治的・文化的独立は、ソ連のみならずドイツ側からも弾圧された。ドイツは、「帝国管区ウクライナ」を設置しナチス親衛隊 SS が直接統治を行った。ウクライナ人は「劣等人種」とみなされ数百万人が、「東方労働者」としてドイツで強制労働させられた。ウクライナに住む全てのユダヤ人は絶滅の対象になった。ユダヤ人虐殺に関しては現地ウクライナ住民の協力があったことが知られている。人だけでなく、穀物や木材などの物的資源も略奪され、ウクライナは荒廃しウクライナ人農民は各地で抵抗した。

ドイツ軍は、1943年春にスターリングラード攻防戦で敗北を喫すると、武装親衛隊（武装 SS）にウクライナ人部隊を創設した。ウクライナ人たちも、ドイツ支配下の自治・独立を希望し、高倍率競争の結果、1万3千人が採用された。

ロシア革命当初レーニン は各民族の独立を奨励したが、ソ連邦政策の箍に嵌め込まれた。英仏は見放したため、1917年～1921年のウクライナ独立革命は挫折した。復讐のためにスターリンは人工的な飢饉「ホロドモール」を実行し、数百万のウクライナ人が死んだ。この苦い経験から、ウクライナ人は自分たちに、よく訓練された正規の軍隊が不足していることを痛感していたのだった。彼等は「ウクライナ人」として、スターリンのソ連軍と戦う機会を得た。しかし一方でユダヤ人虐殺にも荷担した。特筆すべきは、バビ・ヤール（Баби́й Яр）の虐殺である。キエフ市近郊の峡谷で1941年9月29～30日に、ドイツ親衛隊のインザッツ＝グルッペン、ドイツ国防軍部隊、地元の協力者、ウクライナ警察によって、3万3771人のユダヤ系キエフ市民がこの谷で殺害された。第二次世界大戦を通じて約10万人がバビ・ヤールで殺された。ウクライナ警察はユダヤ人をかき集め、峡谷へ向かわせる任にあたった。目撃者の証言によれば、ユダヤ人たちは服を脱ぐように指示され、ウクライナ警察の誘導に従って、順番に手荷物や衣服をそれぞれ指定の場所に置かされた。抵抗すれば殴

られ、最終的に10人ずつの集団でバビ・ヤール峡谷の縁に立たされ、機関銃で組織的に殺された。兵士たちは夕方には峡谷の壁を切り崩して死体を埋めた。バビ・ヤール峡谷での虐殺は、ウクライナ民族主義者組織のメンバー621人や前キエフ市長ウラジミール・バハジュー、活動家など数多のウクライナ市民にも及んだ。1943年2月18日にはドイツ空軍のサッカーチームとの試合に勝ったディナモ・キエフ(サッカーチーム)の3人の選手が近くのシレツ強制収容所で殺害された。体育国ウクライナの面目躍如である。

また、多くのウクライナ人が「ソ連兵」としてドイツと戦い、「元ソ連軍捕虜」としてドイツ軍にも参加した。しかしその多数は死んでいった。やがて、ドイツが敗走して再びソ連軍がやってくると、ウクライナ蜂起軍(UPA)はソ連に抵抗して、破滅的な運命を辿る。戦後、ソ連はUPAに対し復讐し、ポーランドではウクライナ人を強制退去させる「ヴィスワ作戦」が行われた。戦後まもなくの東欧は、新しく引き直された国境線に従って大量の人々が強制移住させられた。ウクライナでも、ポーランドなどから追い出されたウクライナ人が大量に国内へ流入する一方、多くの国内のポーランド人、ユダヤ人は国外へ退去させられた。

ウクライナは第二次世界大戦の最激戦場だった。ソ連政府も、ウクライナ人を前線へ投入した。第二次世界大戦後、殆どのウクライナ人が単一国家の下に統合された。ソビエト連邦内では、ロシアに次いで2番目に重要な国となり、「ソ連の穀倉」といわれた。

しかし現在、ロシアは無辜の東ウクライナ住民をロシアへ強制移住させつつある。

6. 個人的な経験

<キエフ Kyiv (Києв in Russian, Київ in Ukrainian)>

1990年代初頭、ベルリンの壁が崩壊した後にキエフに出掛けました。僅かな滞在でしたが、素晴らしい町だと感じました。着くや否や、偉大なるドニエプル川の上に大都市キエフが堂々と跨っている感を受けました。国旗の青と黄色は、大空と麦畑を象徴しているんだ、とウクライナ人に教えられました。

街を歩くと、「キエフ」の綴りがロシア語とウクライナ語で少し違うことに気付きました。駒場の第三外国語(つまりロクに勉強していない)でロシア語を選択した身には、キリル文字に馴染みが少しあったらです。ウクライナ語の母音字[i]は、ロシア語には無いのです。傍らのウクライナ紳士はビックリして、そして喜びました。東の果てから来やって来た、鼻低短足黄肌のアジア人の言は意外だったようです。

ひとつだけ不愉快だったのは、大量のソ連重戦車の山がキエフ市内の一番見栄えのする場所に夥しく累積陳列されていることでした。ソ連兵の巨大な像がカラシニコフ自動小銃を高く掲げてドニエプル川を見下ろしています。これら醜悪な巨大陳列物

だけはロシア侵攻後、ウクライナ市民によって破壊して欲しかったと思います。尤も既に取り壊しているかもしれません。

鉄のカーテンが壊れた時、アムステルダムからウクライナに人買いの目的でウクライナへ出掛けました。元気な方なら女郎買いを連想されるかもしれませんが、そうではありません。ソ連邦の中でウクライナは番頭役、ロシア人からは虐げられていても、全ソ連邦第二位の国家で他を睥睨するエリート国家でした。材料科学は軍事技術の最たるものですが、ソ連邦の材料科学研究は、ウクライナが仕切っていました。キエフにある材料研究所は、白亜コンクリートの壮大な建物で、長過ぎて端から端まで行きつけないほどです。この研究所は全ソ連邦材料科学の中心で、有能な科学者や研究者が蝟集していました。

ベルリンの壁が崩壊すると直ちに、アメリカは優秀な科学者を持っていきました。第二次世界大戦直後にフォン=ブラウンやドイツ人物理学者を掻っ攫ったのと同じですね。皮肉にも次はドイツが人買いをしました。この様子をオランダから目撃し、我々日本も何とかせねば、と考える有志達がアムステルダム界限に出来ました。そこでオランダ発のルートで材料技術者・研究者を日本にも呼び込むことを図りました。

1990年代初頭のアムステルダムは国際金融の中心でした。某一流商社の本社経理課長がバブル崩壊の責任を取り、オランダに漂着し、私と親友になりました。子分のロンドン支店経理課長がドル紙幣を鞆に一杯詰め込んで私に同行し、私が科学者とインタビューした結果で必要と感じたら、即刻金をいくらでも出す役割になりました。

アムステルダム在住のウクライナ紳士が先導します。現地で1週間ほど、研究所の会議室を占拠して100人近い研究者と面接しました。キャリアー、研究実績、今後興味ある分野、家庭事情、日本企業の研究への意欲などです。皆さんは西側で仕事をするのに大変憧れており、喜んで国外へ出ることを熱望していました。

家庭の事情で我々の都合に合わせて研究所に来られない科学者も居たので、家庭訪問も行いました。ソ連やチェコや東ドイツと同様に、共産圏に典型的なコンクリート塊の集合住宅に住んでいました。エレベーターもありません。しかし、自由な風が吹いてきたこともあるせいか、明るい雰囲気歓迎されました。そして西側の海外生活に希望を膨らませておられました。

残念ですが調べれば調べる程、良い人材は殆どアメリカとドイツに攫われていることが判って来ました。カスの様な老人(私の様な)の二流三流の人材が残って居るだけでした。

<ウクライナの穀倉地帯>

研究所で御世話になった方や研究者達とお別れの会をした時、ウクライナ側の世話役が巨大なスイカを持って来ました。その場で大きなナイフを取り出し、切り分けました。

その美味かったこと！

常温のまま冷してないのに、塩や砂糖皆無で、こんな旨いスイカは生まれて初めて！

その後もあったことはありません。ヒトラーが油田地帯と同様に、ウクライナ穀倉地帯を狙ったのは真実だったんだと納得しました。

<ウクライナのオペラ>

オペラにも出掛けました。

ウクライナを代表するオペラハウスでしたが、ソ連崩壊のせいか佇まいは雑然としていました。中心の客席部分は全て立見席になっていました。私達も立って観劇しました。その後、立派な施設が出来たようですが、今回のウクライナ侵攻で壊されているかもしれないと思うと、憂鬱な気分になります。

オペラの出し物はウクライナ民族の歴史的一幕だったらいいです。今になって思えば、ウクライナ人は自身の民族や歴史を大事にしていることが改めて実感されます。字幕(あったとしてもロシア語もウクライナ語も駄目ですが)なんて無いし、言葉は判りませんから歴史鑑賞も困難、舞踏と衣装と音楽を鑑賞することになりました。尤も音楽も駄目なので、件のロンドン経理課長から「ウクライナのオペラのレベルはオランダなどの西欧に比べてどんなものでしょうか？」と訊かれて往生しました。

<ウクライナの女性>

豊かではないから、高価な生地を纏ってはいないけれど、実にシックで素敵でした。心根はロシア・スラヴの田舎女ではありませんでした。特に西ウクライナ女性は「私はヨーロッパ人なのよ」の雰囲気振り撒いていました。ウクライナの気質は、西と東で大きく異なるようです。

此処の歴史を繙きますと、侵略民族の十字砲火を散々浴びた国柄で、様々な人種の血が混じり合っているのが、美人の大産地なのだとわかりました。スペイン美人、イタリア美人、ヴルカン美人、イスラエル美人と同じ理屈です。

元気な者なら、街を100m歩く毎に口説かずにはおられなかったことでしょう。

スポーツの盛んな国であることも直ぐわかりました。スポーツする女性も体格に優れ、均整の取れた身体は素敵で、美人揃いでした。当時のウクライナは貧しくて、体育大学に通う彼女たちはレストランや酒場でアルバイトをしていました。不祥事発生に備えた用心棒役も、体育系のアルバイト学生で、専門はボクシングやプロレスリングのつわもの達でした。ニュース動画で逞しいウクライナ兵士の筋肉を見るたびに、キエフ体育大学生の様子が浮かびます。ウクライナ軍が簡単にロシア軍に敗けないことが想像出来ます。

ウクライナの人達に関する思い出は全てが素晴らしく、懐かしいものでした。ソ連支配が終わった直後だったから、ウクライナの皆さんは希望に輝いていたので しょう。

7. なぜウクライナ兵は強いのか？

私はウクライナ軍がロシア軍に対して勇敢に戦っていることに驚嘆し、尊敬しています。

1) ウクライナ・コサックの伝統

モスクワ大公国に抵抗し闘ったウクライナ＝コサックの血が流れていると感じています。彼等は夫々住む町や村で各個に戦いました。強権に屈せず、ゲリラ的戦いに慣れているので、正式の国の権威ある軍隊に依存しない逞しさがあると思います。

2) クリミア半島の勇戦

2014年のクリミア侵攻の際、ウクライナ兵は善戦したそうです。当時の日本の防衛次官が欧州駐在の各国駐在武官と話した時、驚いたことがありました。全ての国の駐在武官が異口同音に、「ウクライナ軍が強烈に戦ったのには驚いた。」と称賛していたことです。

3) 残虐なソ連支配に対する恐怖と嫌悪から

* 1944年のワルシャワ蜂起

第二次世界大戦中の1944年8月19日午前7時にパリ市内のレジスタンスが蜂起を開始しました。6月にノルマンデーに上陸した連合軍が快進撃していたからです。1944年8月25日にパリは連合軍によって解放されました。

ワルシャワのポーランド市民は西側の連合軍の進撃に刺激されていました。モスクワ放送も蜂起開始を呼びかけ続けており、赤軍の進撃位置からそのワルシャワ到着は間もないと判断されました。1944年8月1日17時、約5万人のワルシャワ市民は蜂起し、ポーランド人兵士達は橋、官庁、駅、ドイツ軍の兵舎、補給所を襲撃しました。ワルシャワを臨むヴィスワ川対岸に迫ったソ連赤軍は、市街地への渡河が容易な状況にあったにもかかわらず、ポーランド国内軍を支援せず対岸で見殺しにしました。ソ連赤軍の眼前で、蜂起軍はドイツ軍によって殲滅されました。

なぜでしょうか？

蜂起に参加したポーランド人は筋金入りの愛国者であり、戦後の傀儡国家には邪魔になる知的存在だとスターリンは考えました。スターリンの判断は正しく、彼の目論見は成功しました。信じられないほどの狡猾さ・残虐さ・卑劣さです。カチンの森での全ポーランド軍将校の殺戮が如実にこれを裏付けています。

ドイツ鎮圧軍司令官はエーリヒ・フォン・テム・バッハ SS(親衛隊)大将でした。周辺の敗色濃いドイツ軍から大隊編成の個別部隊をかき集めて戦いました。士気が高く統率のとれたポーランド蜂起軍の猛烈な防戦に会い、苦戦は当然でした。ドイツ側はカ

ミンスキー旅団など戦闘より略奪や暴行、虐殺を専らとする連中も使わざるを得ませんでした。

イギリスやアメリカはワルシャワ蜂起軍への支援をソ連に声高に呼びかけました。同じ連合軍同士ですからね。しかし、ポーランド支援を目論む英米軍爆撃機に対し、ソ連占領地域下の飛行場で再補給することはおろか、蜂起軍への支援のために西側連合軍航空機が飛来することすら同意しませんでした。従って西側連合軍は蜂起軍へ何の支援も出来ませんでした。現在のウクライナ侵攻に際し、何も出来ない米国や西欧と似ています。結局質・量に勝るドイツ軍に対して蜂起軍は劣勢に回り、蜂起は失敗しました。

降伏したワルシャワ蜂起ポーランド市民は、ドイツ軍に全員処刑されたと私は思っていました。ドイツ軍の捕虜になり辛うじて生き残ったポーランド人が居たことは驚きでした。フォン・デム・バッハは国防軍ではなく親衛隊の将軍でしたが、軍人らしい男だったようです。ヒトラー任せだったらこうは行かなかったでしょう。バッハ大将はユダヤ人に対するほどには残酷ではなかったようです。しかし、ドイツ軍から生き延びた蜂起市民は、味方である筈のソ連赤軍によって酷い仕打ちを受けました。傀儡政権主導の戦後ポーランド復興には望ましくない人達だったからです。ワルシャワから追われ、懲罰的な境遇へ追い込まれて行きました。ドイツ軍でなく、ソ連赤軍によって落命した人も少なくなかったでしょう。勇敢で本来は指導的立場に立つべきだったポーランドの愛国者たちはクラカウなど地方に追いやられました。その地方で、奈落に墜ちた或るカップルが二人の子を産んで育てました。金髪美人に育った娘の方は、私の親友と恋仲になり、結ばれました。因果は地球上で続いて行きます。彼女はロシア人を今でも嫌悪しています。

***バルト3国の兵士への仕打ち**

バルト3国の国民はドイツ・ソ連両側から占領され、合法的に徴兵されました。第二次世界大戦が終ると、ドイツ側に徴兵されて戦った兵士達はスウェーデンに逃げました。ヨシフ・スターリンのソ連に行けば、反逆者として処刑されるからです。ドイツ軍捕虜になったスターリンの息子を引き渡そうと、ドイツ側は提案しましたがスターリンは拒否しました。捕虜になったソ連兵ですら処刑されるのだから、非ロシア人である彼等の運命は明々白々でした。

ソ連はスウェーデンに彼等兵士の引き渡しを求めました。そして、平和国家を謳う、人道的である筈のスウェーデンはソ連の要求を容れたのです！

引き渡しの現場に世界のジャーナリストが立ち会い、カメラは注視し、回転しました。その時の生々しい動画フィルムが今も残って居ます。兵士達も己れの悲惨な運命を知悉していました。彼等は前夜相談し、行く末の運命は自明だから、せめて世界のジャーナリストの前で世界に訴えることにしました。籤を引いて、ソ連軍に引き渡す寸前、5人に1人が手首を切って自決しました。今でも信じられません。当然ながら残りの

5分の4の人達もソ連国内で確実に処刑されたことでしょう。

*** 陰湿な共産党支配。**

チェコスロヴァキア、ハンガリー、ポーランド、ルーマニア、ポーランド、バルト3国、東ドイツの傀儡政権の悍ましさは東欧ではよく知られている所です。我々が肌で感じるには、映画が良く教えて呉れます。

大戦直後のアンジェイ・ワイダ(Andrzej Wajda)のポーランド映画は、陰惨なソ連の遣り口を描いています。売国奴がロシアの傀儡になって同胞を踏みにじります。これを見たら、ウクライナ人が最後まで戦うと決意した理由が窺えます。

最近の「善き人のためのソナタ」の2006年公開ドイツ映画は、東ドイツのシュタージ(プーチンが活躍した)のドイツ人同胞に対する陰険陰惨さを表現しています。彼の体臭が芬芬と漂います。

マリウポリの親口派市長や、香港の鄭月娥行政長官も、売国奴の類ですね。

*** ウクライナ数百万人の飢餓死**

「ホロドモール」は、1932～1933年にかけてウクライナ人が住んでいた地域で起きた人為的な大飢饉です。当時のウクライナは、ヨシフ・スターリンが最高指導者を務めるソ連の統治下にありました。この出来事は、飢饉を意味する「ホロド」と、疫病や苦死を表す「モール」を合わせて、「ホロドモール」と呼ばれています。オスマン帝国のアルメニア人虐殺や、ドイツのユダヤ人ホロコーストなどと共に、20世紀最大の悲劇に数えられています。

*** 最近の情報**

アメリカのバイデン政権は、2022年3月24日のロシア軍侵攻前に、「ロシア軍は殺害または収容所送りにするウクライナ人のリストを作成しているとの信頼できる情報がある」とミシェル・バチレ国連人権高等弁務官に伝えました。ロシアのいつもの遣り口だと瞬時に感じました。プーチンの最大の目標はゼレンスキーを取り除き、親露派の傀儡政権をキエフに樹立することのようです。英紙タイムズによると、ロシア民間軍事会社ワグナーグループの傭兵やチェチェン共和国の特殊部隊がウクライナに送り込まれたが、ロシア情報機関の連邦保安局(FSB)内の反戦グループがウクライナ側に通報し、暗殺計画はいずれも未遂に終わったとされています。

Das Ende